軽度発達障害のある中学生の指導について

森川　晃太郎　（生涯スポーツ学科　地域スポーツコース）
指導教員　金田　安正

キーワード：発達障害　問題行動　きっかけ

１．緒言

筆者は特別支援学級で障害のある中学生の支援を行なっている。本研究の対象児であるＫ君と関わる中で、「なぜこのような行動をするのだろう」「どのように対応すればよいのだろう」と考えさせられた。様々な問題行動について、その原因と対応法を検討することを目的とした。

２．研究方法

Ｋ君との関わりの記録から問題行動や特徴的行動を抜き出し、文献を探ることなどからその背景を理解し、どのような対応法があるのかを検討する。

３．結果と考察

（１）問題行動の解決に向けて

問題行動は、目に見えない部分に原因がひそんでおり、目に見える部分が行動として表れている。よって、「なぜ」「どうして」という、目に見えない部分に、より着目することが、解決や理解につながる第一歩となる。

（２）　障害児に対する対応法について

１）課題達成に向けて

予測をする、目に見えない目的や目標に向けて動くことが難しい障害児に対し、ただ単発的に指示、対応することでは、適切な支援にはつながらないうえに、自立を助ける支援にはならない。どのようにしてよいかわからないでいる障害児に対して、『きっかけ』を与えることで、課題までの見通しが立つものと考える。

図のように、「Ｋ君」「課題」「支援者（筆者）」の三者が相互に作用しあうことで、Ｋ君の「できない」ことが「できる」というＫ君に見合った対応、支援が可能となる。まず、Ｋ君が可能なことを明確にし(矢印①)、Ｋ君の力量で可能な課題を検討する(矢印②)。分析したＫ君の力量と課題を合致させると、Ｋ君は課題を行うようになり(矢印③)、課題達成につながる(矢印④)。達成できたという喜びが支援者(筆者)の目に映る(矢印⑤)ことで、「こういうことが支援である」という学びと経験、そして次の新たな課題の挑戦への意欲が支援者(筆者)には増すのである(矢印⑥)。

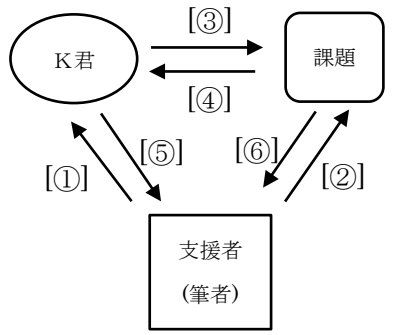

図　「Ｋ君」「課題」「支援者(筆者)」の相互作用

問題行動を抑えることができなかった要因は、Ｋ君と課題に対する筆者の分析不足であったといえる。しかし、この三者をうまく作用させることができれば、Ｋ君の「できない」ことが「できる」ようになる。

４．まとめ

Ｋ君を含め、人はそれぞれ異なるものであるから、決まりきった対応や関わり方はない。よって、「この場面には、この対応を」という対応法を求めることはできない。

障害児がやる気になって、何かしようとしだした、そのちょうど良い機会を見逃がさず、いかに良い『きっかけ』を与えることができるのか、支援者の工夫のしどころである。まず、同じ目線に立って物事を吟味し、何が必要か考えることが対応の基盤となる。そうすることで、見えなかったものが見えてくるのである。

５．参考文献

金田安正（1989）機能訓練と楽しいスポーツ－障害者の自立を助けるために－：全国身体障害者総合福祉センター